年頭のあいさつ

北海道林産技術普及協会
会長　竹内久彌

平成６年の新春，明けましておめでとうございます。

会員の皆様には，ご家族ともどもご健勝で，新しい年をお迎えになったこととお喜び申し上げます。今年も皆様にとって良い年でありますように，心からお祈りしております。皆様には日頃当協会の運営につきまして特段のご理解とご協力を賜り感謝している次第です。

さて，昨年は木材・林産業界にとって極めて厳しい１年でした。国際的にもロシアの政情不安の激化，カンボジアの停戦，中東和平など，国内的には，自由民主党一党支配の終焉，景気の一層の後退，「米」の関税化，加えて未曾有の大冷害など数え切れないくらいの変動の年でした。政権交代による新しい景気浮揚策を期待したものの，今だにあまり効果が上がっていないのが現状です。ただ，木材産業だけではなく，建設業，食品産業など一部を除けばどの産業も死に物狂いで当座をしのいできた一年というのが実態でしょう。

木材産業にとって多少好転のきざしが見えるのは，住宅産業の活気が一昨年来続いていることでしょう。今年に入って住宅建設の金利がさらに引き下げられることが決まり，一層の弾みになることは間違いありません。ただ，問題なのは，今までの住宅着工数増＝木材需要の拡大というパターンが崩れかけている傾向がみえる点です。針葉樹業界はある程度潤うにしても，例えば，新築すれば家具も新しく，といった従来の傾向が，社会全体の不況感から買い替えが控えめで，広葉樹業界はやはり大変な状態が続いています。

また，パルプ業界の不況と，安い外材チップ，外国産パルプの輸入があいまって，チップ業界は存亡の危機にさらされています。チップの不況は，間伐材をはじめ中小径材の需要減退を招き，一層山造りの意欲を衰退させることになるので，単にチップ業界だけの問題として捕らえるわけには参りません。チップの他の用途への利用技術の開発，原料価格の引き下げを始めとするコストダウンなど，安い外材との競争力をいかに高めていくかが，目下の最大の課題かと思います。

今年の木材業界の新年祝賀会である方がこんなあいさつをされました。

「私は，大学を出ても職がない，酒を飲みたくても金がない，腹が減っても食い物がない，そんな時代を経験してきた。皆さんはうまいものをたらふく食い，飲みたいだけ酒を飲んで，不況不況とおっしゃる。本当の不況はこんなもんではない。じめじめしないで，各企業が創意工夫をこらして頑張ってもらいたい。」

その通りだと思います。上を見ればきりがない，下を見てもきりがない。酪農，畜産のように全く展望の見えない業種だってあるのです。各企業が必死になって，この激動の平成６年を切り開いて行けば将来の展望は開けるのではないでしょうか。

当協会としても，北海道立林産試験場をはじめ関係諸機関のご協力を賜りながら，会員各位のニーズに最大限応えて行くよう積極的に活動を展開することをお誓いして，新春のごあいさつとします。